

こころみち・対談1

継続は力なりと言う。

一人の人間が継続できる年月は一生を費やしても五十年から六十年。

弥山開創千二百年とは

想像できない長い年月である。

平成十八年。この記念すべき年に

「こころみち」はスタートします。

先達のところに響くメッセージを

皆様とともに聞きし

心豊かな社会の創造を目指して…

亭主：吉田 正裕

プロフィール

1960年生まれ。広島県出身。

種智院大学仏教学部及び仁和密教学院卒業後、

真言宗御室派大本山大聖院勤務。

1990年高野山真言宗真光院住職(現在も兼務)。

1998年真言宗御室派大本山大聖院座主に着任。現在に至る。

仏教のみならず、スポーツ、教育、町づくりなど

幅広く活動を続ける。

第一回 客人：平岡 敬

プロフィール

1927年生まれ。広島県出身。

中国新聞社編集局長を経て、中国放送専務、同社長を歴任。

1991年以降2期広島市長。

中国・地域づくり交流会会長。

ヒロシマ・セミパラチンスクプロジェクト名誉会長。

悠々風土の会会長。

著書に「偏見と差別」(未来社)、「希望のヒロシマ」(岩波書店)他

人間は神のような心と 悪魔のような心を持つている。

子供たちには
ファーストフードばかりではなく
季節や旬の味を知ってほしい。

吉田 今年は弘法大師が弥山を開かれて丁度千二百年の節目を迎えまして、広く皆様にお伝えしたいとの思いで、千二百年祭実行委員会をつくり、多くの方々にご協力いただきおられます。平岡様にも実行委員長をお引き受けいただき感謝しております。

その記念イベントの中で、弘法大師が生きておられた時代の料理を復元するという事業を行い、平岡様にはその試食会にもお越しいただきましたがいかがでしたか。

平岡 なかなかよかったです。千二百年前の人たちは、こういうものを食べながら今日まで命や文化を伝えてきたのだなと、思い直すいい機会でした。

吉田 ありがとうございます。

食文化から、そういつたことに皆様に気が付いていただければという思いで行なつたのですが、そういつていただくと嬉しいですね。平岡様も食に関する活動をなさつておられるそうですね。

平岡 「悠々風土の会」といいます。「悠々」というのは「スロー」、「風土」を食物の「フード」という言葉にかけています。

吉田 「悠々風土の会」では、具体的にどのような活動をなさっていますか。

平岡 「悠々風土の会」では、生産者の方に出来るだけ安全な食品を作つていただくということをしています。ところが、安全な食品というのは、例えば殺虫剤を使わないで作物を作ろうとすると、虫の食つた野菜は商品価値が下がりがり値段も下がる。それでも農家の方は、自分が食べるものには農薬を使つていません。見てくれのいい物の方が商品価値が高くなるなら、どうしても農薬を使わなくてはいけなくなる。それならば我々消費者が、見てくれでなく本当に美味しく安全なものは何かを理解すればいい。その両方をつなぐ役割を「悠々風土の会」でやろうとしてるんです。そして、子供たちには、ファーストフードの「いつでも、どこでも、同じ味」ばかりでなく、季節の違いや旬の味を知つて欲しいし、同じ鮎でも採れる川で違うこと。水が違う、日照時間が違う、苔が違う。そんな風味の違いをわかるような舌を子供たちに伝えて行きたいですね。

吉田 私たちには、修行のときに食時(じきじ)作法という、食事を頂く時の色々な作法があつて、その中に五つほどの言葉を述べる「五観の偈(ごかんのかげ)」というものがあります。最初にいうのは「一には功の多少を計り、かの来処を量る」という偈で、「この食べものができる(こ)までの苦勞を考ふる」という意味なんです。私たちは今でも食べ物をつくる苦勞や食べものにはそれぞれ命があると教えられています。食べものを大切にしていた時代は、そういつたことはどこの家庭でも当たり前だつたと思うんです。それが、いつのまにか忘れられて、平気で食べものを残す人には驚かされます。

平岡 今、命の元になる食への関心や想いが薄れています。食べられるならとにかく何でもいいという感じで、だから食べるということとは「命を頂く」のだということをもう一度思い起こしてもらいたいんです。

う一度思い起こしてもらいたいです。

家庭から出るごみの90%が食べられるもの。賞味期限が切れたというだけで捨てられているという調査結果もありました。たしかに、我が家でも冷蔵庫の掃除をすると、色々なものが出てくる。中には、食べる気もおこらないほど古いものも出てきたりするんですが、食べものを粗末にすることは、私たちの生活のあり方に原因があるのかもしれないですね。

子供が自立していけるようにすることが 本当の「愛」かも知れませんね。

吉田 千里の行も足下に始まるといいますから第一歩というのはやはり人間教育の最初
の場である家庭。家庭での食事から生きるといふことを学ぶことが出来るんでしょ
ね。

平岡 私はよく「食の5無」といっているのですが、「食の季節感」「地域色」「食の安全」「国
産品」そして「家庭の団欒」の五つが昔に比べてなくなりました。昔のちやぶ台を囲んでの
家族の和やかな感じがなくなりました。それがやはり子供たちにも大きな影響を与えてい
る気がします。

吉田 親が忙しいということもあるのですが、子供たちも習い事などで忙しい。そんな
子供たちの生活の変化が家庭における食事の時間の変化をつくり、個性が増える。そ
れは人間の心の形成にとっていいことではないですよ。家族が揃って食事をする
と、食卓を挟んで会話が起るから、話し合いも始まるし、しつけの機会も出来る。
もちろん、読み書きそろばんもだいじですよ。それ以上に基本的なこと、火をおこす
とか、物を切る、削るといったようなことを知ること。昔は子供が多かったから、ほ
つとかれることも多くて子どもは自然と生きる力を学んだ。今の子供たちは生きる力
をあらためて身につけなくてはいけない。それを教えるのが教育だと思ふ。

平岡 今、子供の居場所がなくなるといわれていますね。
外で遊ぶと危険。子供をめぐっての犯罪も増えています。社会がゆがんできた。家庭
自体も崩壊してきた。いくら考えても、基本的に人間の生き方、家庭のあり方が問題
だと思えてしょうがないんです。

吉田 我々は戦後の物のない時代、物を求めて働いてきた。それが間違いだとはいいません
が、所有指向型の生き方から、今あること、存在していることをどう感じるか。心の
充実を求めていく。そういう生き方、生きていることを充実させる生き方に変わって
いく必要があるんじゃないかな。

吉田 私戦後の豊かな時代の世代ですが、物が豊かになるにつれて心や自然の大切さを忘
れてしまっているのでは。

平岡 ええ。自然に対しての畏れを私たちは失っていると思えます。自然だとか宗教とい
つたものを、いい意味で取り戻さなくてはいけない。自然には科学や人智では知り知れ
ないものが沢山あって、宮島が大変な被害を受けた台風一つ、人力を持つていか
んともしがたいでしょ。だから自然をつくる基のような原子や遺伝子を人間が操作し
てはいけない。人間は、神のような心と、悪魔のような心を持つている中途半端で未
熟な存在なんです。悪魔のような心をコントロールするためにも、自然に対して
謙虚でなくてはいけないと思ふ。

吉田 我々はとかく忘れがちですが、土石流にあってあらためて自然の力は恐ろしいなと思
いました。それで、という訳ではないのですが、私どものお寺でも、自然を感じる機
会、そして集団生活から何かを学んで欲しいと「小坊主の会」を行なっているんです。

1泊2日で宗教体験をしたり弥山に登ったりしているのですが、お寺での行事では限界を感じていました。そんなとき、ある方から「大人が育つ、子供が育つ、地域づくり」をテーマに地域の大人から大学生、もちろん子供たちまで参加する「鎌倉寺子屋」の活動を紹介していただき、これだと思ひ、今年6月に多くの方々とともに寺子屋宮島版「未来づくりフォーラム」を宮島で開催したんです。

平岡 それはいいですね。子供が自立する機会をつくるのが大切だと思います。所詮親は先に死ぬわけですから、生きる力を付けさせることが親の責任。いつまでも甘えあつてはいけません。もちろん可愛がるのもいいけど、家庭の平和だけを求めるのではなく、社会性というか子供が自立していけるようにすることが、本当の「愛」かもしれないですね。

吉田 大人になっても子供のままで、それで親になつている人も。

平岡 子育ての知恵の伝承も途切れてしまつてますしね。本当は生まれるところと死ぬところをみなければいけないんです。昔は、みな家で生まれ、家で死んでいった。

吉田 家が死ぬことは幸せなことだったんですね。

平岡

自分が生まれ育つたところで死ぬことはとても幸せなことです。それが出来なくなつたのは、自然の営みから人間の暮らしが離れてきたからかも知れない。そういういびつになつた人間が犯罪を犯したりするのではないでしょうか。人の命が大切だということとはみんな知っている。でも、本当にそれを実感するのは、生き物を殺したとき。子供のときに虫の羽をとつたりかえるの足を引きちぎつたり…残酷に見えるけどね。カブトムシはデパートに買いに行く。

吉田

それをおかしいと思わなくてはいけない。今の社会生活の中ではいつべんには無理だけれども、子供たちが自然や集団生活の機会を持つて、人間のどうしの付き合い方を覚えることが大切だと思う。

吉田

そんな中で、今私たちに出来ることは何でしょう。知識を頭に詰め込むだけでなく、感じることをナビゲートすること。資源を大切に、物を捨てないとか、環境を大切にすること。同時に、人には親切であること。

僕らはよく核兵器廃絶だとか平和だとか言いますが、その基本もやはり、物を粗末にしないとか物を浪費しないという当たり前のことが非常に大事なんです。そして、そろそろ効率ばかり追求するスピード信仰から脱しないと。

吉田

「もったいない」の思いを、もう一度思い起こし、「こころ豊かな社会」「こころ豊かに生きる」ということを皆様と一緒に考えてまいりたいとおもいます。本日は、お忙しい中ありがとうございます。

2006年9月2日 宮島大聖院にて